

「武庫川国文」第八十六号 抜刷
平成三十一年三月二十日 発行

citation and similar papers at core.ac.uk

『源氏物語』における子どもの詠歌考

藪

葉子

brought to

『源氏物語』における子どもの詠歌考

藪 葉 子

一 『源氏物語』に見える子どもの詠歌の状況

『源氏物語』に見える登場人物たちが詠んだ和歌は、およそ八〇〇首である。それらのほとんどすべては元服・裳着を終えた成人の歌であり、幼い子どもが詠んだ歌は六首のみである^(注二)。その六首の詠み人は、紫の上・明石の姫君・真木柱の君・玉鬘の中の君に仕える童女である。すべて女性である。あえて幼い子どもたちが歌を詠む場面が描かれている意図は、無論あるだろう。また、それら子どもの歌が、女性の歌のみである事実からも窺えることがあろうと思う。およそ八〇〇例を数える詠歌の用例の中で、わずか六例という希少な用例で表現されていることは何なのか。

本稿では、『源氏物語』の子どもの詠歌に注目して、そこから見出せるものを探ってみる。

二 裳着以前の紫の上の詠歌

六首の子どもの詠歌の中で、裳着以前の紫の上が詠んだ歌は二首ある。その二首の特徴の一つとして、紫の上の二首のみが男性との贈答の中で見えるという点がある。贈答の相手の男性は、源氏である。他の子どもの詠歌四首は、実母との贈答が二首・主人や大人の

女房たちとの唱和歌が二首である。

まだ裳着を行っていない紫の上の詠歌二首は、若紫巻と葵巻に一首ずつ見える。まず、若紫巻の場面は、以下のようなものである。

君は三日内裏へも参りたまはで、この人をなつけ語らひきこえたまふ。やがて本にとおぼすにや、手習、絵などさまざまに書きつつ見せたてまつりたまふ。いみじうをかしげに書き集めたまへり。「武蔵野といへばかこたれぬ」と紫の紙に書いたまへる、墨つきのいとことなるを取りて見ぬたまへり。すこし小さくて、

(源氏)ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の

露分けわぶる草のゆかりを

とあり。「いで、君も書いたまへ」とあれば、「まだ、ようは書かず」とて、見上げたまへるが、何心なくうつしげなれば、うちほほえて、「よからねど、むげに書かぬこそわろけれ。教へきこえむかし」とのたまへば、うちそばみて書いたまふ手つき、筆とりたまへるさまのをさなげなるも、らうたうのみおほゆれば、心ながらあやしとおぼす。「書きそこなひつ」と恥ぢて隠したまふを、せめて見たまへば、

(紫上)かこつべきゆゑを知らねばおぼつかな

いかなる草のゆかりなるらむ

と、いと若^{わか}けれど、生^なひさき見えて、ふくよかに書いたまへり。
故尼君^{こにきみ}のにぞ似たりける。今めかしき手本^{てほん}習^{しな}はば、いとう書
いたまひてむと見たまふ。雛^{ひな}など、わざと屋^やども作りつづけて、
もろともに遊びつつ、こよなきもの思^{おも}ひのまぎらはしなり。

(若紫卷・二三八頁) (注三)

ここに見える返歌「かこつべき……」が、物語で紫の上が詠んだ
第一首目である。この時点における紫の上の年齢は、当場面と同年
を描く北山の垣間見場面で、「十ばかりにやあらむと見えて」(若
紫卷・一八九頁)とあるように、源氏の目には十歳くらいであると
映っている。物語の年立で若紫卷の翌年を描く紅葉賀卷では、少納
言の乳母が紫の上を指して、「十にあまりぬる人」(紅葉賀卷・二〇
頁)と発言していることから、若紫卷の「かこつべき……」の歌
は、紫の上十歳の時点での詠歌として記されていると捉えて問題は
ないだろう (注三)。

この場面は、「君は二三日内裏へも参りたまはで」と語り出され
ており、源氏が私邸の二条院に紫の上を迎えた直後二三日の様子
が描かれている。ここで記される紫の上の特徴としては、「何心なし」
「うつくし」「幼し」「らうたし」「若し」といった、幼さや未熟さを
表現する言葉が重ねて用いられて、先立つ北山の垣間見場面に続き、
紫の上の子どものっぽい様子が強調されている。また、「まだ、よう
は書かず」と言つて源氏を見上げるそぶりや、「書きそこなひつ」
と言つて、歌を書き記した紙を恥じらつて隠すしぐさなどにもあど
けなさが十分表現されているのである。

このような紫の上の幼さが強調された場面に見える、紫の上の物
語第一首目「かこつべき……」の歌にまず注目してみる。

三 若紫卷の紫の上の詠歌

紫の上が物語に登場してくる若紫卷に、彼女の詠歌は「かこつべ
き……」の一首のみである。紫の上の物語第二首目は、若紫卷から
物語の年立で四年経った葵卷まで見られない。若紫卷から葵卷の間に
位置する末摘花卷・紅葉賀卷・花宴卷にも、源氏と紫の上との睦
まじい場面は描かれているのだが、二人の歌の贈答場面はない。そ
して紫の上の詠歌も見られないのである。

紫の上の物語第二首目が見られるのは、源氏との新枕の場面をお
よそ半年後に控えた葵卷の場面である。紫の上の年齢も十代半ばと
なっており、それまで少女として描かれていた紫の上が、大人の女
君として描き始められるあたりである。そもそも、『源氏物語』全
体としても、成人前の幼い人物が歌を詠むといった場面は希少な
のである。このような紫の上、ひいては物語全体における詠歌の状況
を考えるならば、若紫卷に見られる幼い紫の上の詠歌は特異な例と
言え、この歌の存在意義は大変重要であろうと思われるのである。

その紫の上の物語第一首目「かこつべきゆゑを知らねばおほつ
かないかなる草のゆかりなるらむ」は、源氏が紙に書きつけた「知ら
ねども武蔵野といへばかたれぬよしやさこそは紫のゆゑ」(『古今
六帖』五「紫」) (注四) の古歌と、源氏の詠歌「ねは見ねどあはれと
ぞ思ふ武蔵野の露分けわぶる草のゆかりを」の両歌を踏まえたもの
である。源氏の記した二首の歌はともに、「紫のひとつとゆゑに武

蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」(『古今集』卷十七雑歌上・詠み人知らず)を踏まえたもので、思いを遂げられぬ藤壺の宮への恋心と、その藤壺の宮と血縁ある紫の上を形代として求める気持ち託されている。「武蔵野の……」の古歌のみでなく、「ねは見ねど(まだ共寝はしていないけれど)……」の詠歌を書き加えるあたり、藤壺の宮との逢瀬を重ねながらも(注五)、思うにまかせぬ藤壺の宮への恋心を抑えがたく募らせている青年源氏の心が表現されているのである。

紫の上の歌は、源氏が記した二首に詠まれている「かこつ」「ゆゑ」「知らず」「草のゆかり」といった言葉を用いて歌われている。紫の上の歌では、源氏が自分に恋の恨みを言う理由が分らないとして、「かこつべきゆゑを知らねば」と詠み出されているが、「知らず」という言葉は、源氏と紫の上との物語の始まりにおいて注目すべき言葉である。

四 若紫巻の歌における「知らず」

「知らず」は、北山での紫の上登場場面での尼君と女房との贈答歌にも詠まれていた。

(尼君) 生ひ立たむありかも知らぬ若草を

おくらす露ぞ消えむ空なき

またぬたる大人、げにとうち泣きて、

(女房) 初草の生ひゆく末も知らぬまに

いかでか露の消えむとすらむ (若紫巻・一九一頁)

この贈答歌は、若紫巻で最初に見える歌である。つまり、この贈答歌から紫の上の物語が始まるとも言い得る重要な歌である。女房の「初草の……」の返歌は、紫の上を残して逝く不安を「いみじく泣く」(若紫巻・一九一頁)と、ひどく泣きながら詠む尼君を慰めるために、「生ひ立たむありかも知らぬ若草」「露ぞ消えむ」と歌う尼君の上の句と下の句をともに表現上も強く受けて詠まれている。病身の尼君の気持ちに非常に寄り添った歌となっている。尼君に強く気持ちを寄り添わしているこの女房の様子は、「げにとうち泣きて」と、自身も泣きながら返歌を詠むところにも表れている。女房の返歌は、「知らぬ」という言葉の他にも「生ひ立つ(生ひゆく)」「若草(初草)」「露」「消ゆ」といった語を尼君の贈答歌から受けて詠まれている。しかし、尼君が歌で吐露している不安は、まだ幼い紫の上が、自分の死後にどこで誰にどのように育てられるのか見当がつかないという、孫娘である紫の上の将来を心配するものである。そのような意味で、紫の上の物語の始発の贈答歌である「生ひ立たむ……」「初草の……」の歌において、「知らぬ(分らない)」は特に重要な言葉だと考えられるのである。

若紫巻で歌に「知らず」が詠まれている例は、全四首ある。北山での尼君と女房の贈答歌二首と、第二章に挙げた紫の上の源氏への返歌「かこつべき……」の他に、もう一首、少納言の乳母の源氏への返歌の中に詠まれている。

(源氏)「何か、かうくりかへし聞こえ知らする心のほどを、つつ

みたまふらむ。(中略)

あしわかの浦にみるめはかたくとも

こは立ちながらかへる波かは

めざましからむ」とのたまへば、「げにこそ、いとかしこけれ」とて、

（少納言の乳母）「寄る波の心も知らでわかの浦に

玉藻なびかむほどぞ浮きたる

わりなきこと」と聞こゆるさまのもの馴れたるに、すこし罪ゆるされたまふ。「なぞ越えざらむ」と、うち誦じたまへるを、身にしみて若き人々思へり。（若紫巻・二二二頁）

源氏と少納言の乳母とのこの歌の贈答場面は、尼君が亡くなった後、源氏が紫の上のもとを訪れて、初めて紫の上に添い寝をするくだりである。

……手をさし入れて探りたまへれば、なよやかなる御衣に、髪はつやつやとかかりて、末のふさやかに探りつけられたるほど、いとうつくしう思ひやらる。手をとらへたまへば、……

（若紫巻・二二四頁）

などこの場面の状況は述べられている。御簾の下から手を入れて源氏が紫の上の身体に初めて触れ、そればかりか「いと馴れ顔に御帳のうちに入りたまへば」（若紫巻・二二五頁）と、紫の上の帳台の内に入って添い臥すという、源氏の紫の上に対する態度の進展が描かれる場面である。十歳の紫の上を相手に、源氏は「單ばかりを押しくくみて」（若紫巻・二二五頁）と、肌着の単の上から紫の上を抱きしめる以上の行動には至らない。しかし、「いざ、たまへよ、

をかしき絵など多く、雛遊びなどする所に」（若紫巻・二二五頁）「明け暮れながめはべる所にわたしたてまつらむ」（若紫巻・二二六頁）といった、紫の上を私邸に引き取りたい意思を重ねて述べる源氏の発言や、「宮も御迎へになど聞こえのたまふめれど、この御四十九日過ぐしてや、など思ひたまふる」（若紫巻・二二六頁）と、紫の上の父宮が彼女を迎える旨の事情が少納言の乳母から源氏に知らされるなど、源氏の紫の上引き取りへの展開につながる重要な場面である。

ここの少納言の乳母の源氏への返歌は、「寄る波の心も知らで……」と「姫君が源氏さまのご本心も分からないでなびいてしまつたら、行く末の頼りないことです」と、紫の上に執心する気持ちこそ訴える源氏の歌に対して、紫の上の将来を心配する乳母の気持ちが歌われている。

このように、若紫巻の歌で「知らず（分からない）」といった言葉が紫の上の詠歌「かこつべき……」に先だつて詠まれる三首ではどれも、尼君・女房・少納言の乳母といった、紫の上を守る立場にいる大人たちが、紫の上の将来を不安に思う気持ちを表現して「知らず」の詠まれている点が共通しているのである。

五 若紫巻の源氏の引用歌に見える「知る」

少納言の乳母や紫の上が源氏に対して「知らず」という言葉を詠じる二場面において、源氏が引用する古歌が一首ずつ記されている。まず、第四章で挙げた場面に「『なぞ越えざらむ』と、うち誦じたまへるを、身にしみて若き人々思へり」と見える次の歌である。

人知れぬ身はいそげども年を経てなど越えがたき逢坂の関

〔後撰集〕卷十一・恋三・藤原伊尹

源氏がこの古歌を口ずさむのを、若い女房たちは深く感動して聞いているという。この藤原伊尹の歌は、「あなたに知られぬわたし自身はひとり急いでいるが、どうして一年以上経っても逢瀬を持っていないのか」と、進展しない恋の苛立ちを詠んだものである。この歌の引用に託されている源氏の恋の苛立ちの気持ちには、紫の上を相手に進展しない苛立ちに加えて、藤壺の宮への思うにまかせぬ恋情のもどかしさが、間違いなく重ねられていると読める。この歌が引用される場面の季節は、尼君の死去の後、ひと月の忌が済んだ冬である。同年の秋には、源氏の藤壺の宮へのいっそう募る思いが、次のように記されている、

秋の夕は、まして、心のいとまなくおぼし乱るる人の御あたり
に心をかけて、あながちなるゆかりも尋ねまほしき心もまさり
たまふなるべし。「消えむ空なき」とありし夕おぼし出でられて、
恋しくも、また、見は劣りやせむと、さすがにあやふし。

（源氏）手に摘みていつしかも見む紫の

根にかよひける野辺の若草（若紫巻・二二〇頁）

「秋の夕暮時は、いっそう心の休まる時もなく恋い焦がれている御方のことが頭を離れないので……」と、藤壺の宮への募る思いの延長に紫の上を強く求める源氏の気持ち語られている。ここで源氏は「消えむ空なき」とありし夕おぼし出でられて」と、尼君が「生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露を消えむ空なき」の歌を

詠んだ、北山の垣間見の時を思い出している。ただ、紫の上の将来を心から案じて、ひどく泣きながら「生ひ立たむ……」の歌を詠んだ尼君の気持ちに、源氏はまったく思い至っていない。したがって、孫娘の将来の不安を尼君が表現した歌中の「知らぬ」の言葉も、源氏には重く響かなかったようで、垣間見の時の尼君の詠歌を思い出しながらも、「若草」の語のみが源氏の「手に摘みて……」の歌に用いられている。歌語の「若草」は、源氏に「紫草」を連想させており、紫の上の幸福のために将来の確かなものを望む尼君の気持ちとは裏腹に、紫の上という人物の存在はさておき、あくまで藤壺の宮の形代としてのみ源氏との関係が始まろうとしている紫の上の先行き不安定な状態を、尼君の詠歌の「知らぬ」の語が源氏には受け止められていないところに表現されていると考えられる。

では、源氏が紫の上を抱擁して添い寝するなど、にわかに紫の上に接近する場面で源氏が口ずさむ「人知れぬ……」の古歌についてであるが、この歌にも「知る」の語は詠まれている。この歌では、自分が「知らぬ（分からない）」のではなく、「人知れぬ（自分があなたに分かってもらえない）」という「知る」の主体の違いはあるものの、紫の上の物語の始まりに繰り返して詠まれる「知る」の語が、この引用歌にも詠まれている点は興味深い。この引用歌で源氏が「自分の気持ちが分かってもらえず気持ちが急ぐ」としているのは、藤壺の宮への募る思いを早く紫の上に向けて気持ちを晴らしたいからであり、紫の上を首尾よく私邸に引き取った後に、「こよなきもの思ひのまぎらはしなり」（若紫巻・二三九頁）となっている通りである。すると、「知る」という語は、垣間見場面における紫の上の先行きを思つての尼君と女房との両者泣きながらの歌の贈答、そし

て尼君亡き後、最も強く紫の上を守る存在となつた少納言の乳母の源氏への返歌に詠まれてきた語であるだけに、源氏の引用歌「人知れぬ……」の「知る」の語は、紫の上の身を案じる成人女性たちの思いを裏切る皮肉な語として物語に響くのである。

源氏が引用する二首目は、第二章で挙げた場面で源氏が紫の紙に書きつけた次の歌である。

知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ
〔古今六帖〕五「紫」

この歌は、「武蔵野という土地のことは知らないけれど、縁を思い出させる紫草の生えるところだと思ふと武蔵野と聞くだけで嘆いてしまう」という、いとしい人との縁に動揺する心を歌ったものである。この歌にも「知る」の語は詠まれており、ここでは打消の助動詞「ず」を伴って「知らね（知らない）」となつてゐる。源氏はこの古歌を紫の紙に書いているのであり、今、目の前にいる紫の上が知ることにない自身の藤壺の宮への思慕の気持ちを感じるがままに表現している。

六 紫の上の詠歌における「知る」

紫の上の初期の物語にまつわる歌に見える「知る」の語に注目してきたが、紫の上自身の物語第一首目「かこつべき……」の歌にも「知る」の語は詠まれているのである。「かこつべきゆゑを知らねば……」と、源氏が古歌に託して自分に不満を訴える理由がわからな

いと切り返す内容の歌であるが、これは物語の重要な女主人公である紫の上の物語第一首目の歌であるとともに、これまで紫の上に関わる歌で詠まれてきた「知る」の系譜にも連なる非常に重要な歌である。もつとも、まだ十歳の少女の歌であるため、紫の上の詠歌の「知らねば」は、表面的には源氏の書いた古歌の初句「知らねども」を素直に受けた詠みと捉えられよう。ここで、これまで紫の上にまつわつて詠まれてきた「知る」の系譜を考え合わせてみる。すると、「知る」の語は、彼女の将来を案じてまわりの成人女性たちによつて詠まれてきた語でありながら、紫の上に直接吐露されて彼女が最初に反応を示す「知る」は、源氏の藤壺の宮への秘めた愛情を包み込んだ「知る」であるという点は、紫の上の人生の先行きの悲しさを感じ取らせる。「かこつべき……」の歌は、「知らず」と「おぼつかなし」の言葉によつて、源氏から自分に向けられている気持ちの理解できない紫の上の不安な気持ちが歌われている。この歌が紫の上の物語第一首目であることを思うならば、紫の上の物語とは、まわりの大人たちに重ねて心配されてきたように、やはり不安を抱えるものであることを、この物語第一首目の歌が象徴していよう。紫の上を知るはずもない源氏の藤壺の宮への思慕の情に、幼い紫の上が思い至らないのは当然である。ただ、紫の上の幼さが強調された場面で、源氏が自分に向けている気持ちの真意を、自分は理解できていないのだとの彼女の認識が初めての詠歌で示されていることによつて、物語での紫の上の人生の哀れさとともに、紫の上という人物の聡明さと、尼君から受けた教育の確かさもまた同時に表現されているのである。^{〔注六〕}

紫の上の成人前の詠歌は葵巻にもう一首見られる。

(源氏) はかりなき千尋の底の海松ぶさの

生ひゆくすゑはわれのみぞ見む

と聞こえたまへば、

(紫の上) 千尋ともいかでか知らむさだめなく

満ち干る潮ののどけからぬに

と、ものに書きつけておはするさま、らうらうじきものから、
若うをかしきを、めでたしとおぼす。(葵巻・七五頁)

葵祭の当日に源氏が紫の上と見物に出かける場面である。ここで見られる紫の上の源氏への返歌は、彼女の物語第一首目が詠まれた時点から物語上で四年経っており、紫の上の様子も「らうらうじきものから(もの慣れた様子ながら)」と、成長して大人びてきた様子が示されている。しかし、この物語第二首目には第一首目との重要な共通点も見られるのである。

まず、この歌においてもまた、「知る」の語が詠まれている。源氏が紫の上の将来を寿いで「はかりなき千尋」と詠んだことを受けて、紫の上は「千尋ともいかでか知らむ」と詠み返しているが、この歌の「知る」も「分かっている」という肯定の認識ではなく、彼女の物語第一首目と同じく、「どうして私に分かりましようか」と、源氏の自分に向けられる気持ちの強さが理解しかねるといったものである。

物語に見える紫の上の詠歌全二十二首において、「知る」の語が詠まれているのは、裳着以前に彼女が詠んだ若紫巻・葵巻の二首のみである。すると、この二首における「知る」の語は、それまでの紫の上に関わる「知る」の語とあわせて大変興味ぶかい言葉である。

紫の上の裳着以前の二首の詠歌がともに、「知る」の語を使って(「源氏の思いの強さが」理解できない」という共通の気持ちを表した歌であることは注目し得よう。理解できないものに飲み込まれ進んでいく紫の上の物語での人生をこの二首は確かに示しているのである。

七 子どもの詠歌から分かること

では、続いて紫の上以外の子どもたちの詠歌四首を一覧してみる。

○(明石の姫君) ひきわかれ年は経れども鶯の

巢立ちし松の根を忘れめや(初音巻・一四頁)

○(真木柱の君) 今とはとて宿かれぬとも馴れ来つる

真木の柱はわれを忘るな(真木柱巻・二二五頁)

○(童女) 大空の風に散れども桜花

おのがものとぞかきつめて見る(竹河巻・二二〇頁)

○(なれき) 桜花にほひあまたに散らさじと

おほふばかりの袖はありやは(同右)

これら四首の詠み人は、八歳の明石の姫君・十二・三歳の真木柱の君・玉鬘の中の君の童女二人である。中の君の童女たちの年齢は未詳である。これらの歌を一覧して気づくことは、「年は経れども」「宿かれぬとも」「風に散れども」というように、「とも」「ども」という逆説の接続助詞を用いての詠みが、三首共通の型として見られる点である。裳着以前の紫の上の詠歌も葵巻の歌は「千尋とも

……」と、逆説の接続助詞「とも」が使われていた。

「とも」「ども」という逆接の接続助詞を使って詠まれている歌は、『源氏物語』の作中の歌を一覧しても六〇首以上の多くが見られる。その中には源氏の歌も数多くある。前掲の真木柱の君の歌「今はとて……」に対し、母親である髭黒の北の方は、「馴れきとは思ひ出づとも何により立ちとまるべき真木の柱ぞ」という歌を詠んで応じている。この北の方の返歌も「思ひ出づとも」と、接続助詞「とも」を使って詠まれている。「宿かれぬとも」「思ひ出づとも」と、贈答歌で同じ表現がともに詠まれているのである。このように、贈答の両歌で「とも」「ども」が詠まれている例は、物語中に他にも見ることが出来る。他の例を一覧してみる。

○（常夏の女）山がつの垣は荒るともをりをりに

あはれはかけよ撫子の露

（頭の中將）咲きまじる色は何れと分かねども

なほ常夏にしくものぞなき（帚木卷・七二頁）

○（源氏）月のすむ雲居をかけてしたふとも

この世の闇になほやまどはむ

（藤壺の宮）おほかたの憂きにつけてはいとへども

いつかこの世を背き果つべき（賢木卷・一七四頁）

○（冷泉院）世をいとふ心は山にかよへども

八重たつ雲を君や隔つる

（八の宮）あと絶えて心すむとはなけれど

世をうち山に宿をこそかれ（橋姫卷・二六七頁）

○（薫）小夜衣着て馴れきとは言はずとも

かことばかりはかけずしもあらじ

（大君）隔てなき心ばかりは通ふとも

馴れし袖とはかけじとぞおもふ（総角卷・六〇頁）

これら四例と、真木柱卷の真木柱の君と母親との贈答例とで全五例である。それらの例を概観してみると、いずれの例もかなり切迫した状況のもとに詠まれているといった特徴がある。失踪することを知れず覚悟して詠んだ常夏の女の贈歌とそれに対する頭の中將の返歌、藤壺の出家当日の源氏と藤壺の宮との贈答歌、冷泉院と不遇な兄八の宮との初めての贈答歌、八の宮の中の君と匂の宮との三日夜の餅の儀式当日の薫と大君との贈答歌、そして住み慣れた邸を去る直前に詠まれた真木柱の君と母親との贈答歌、といった様相である。人生の重要な局面にいる詠み人の切迫した気持ちとともに、贈答歌が記されている。これらの贈答歌の例で特に注目すべきは、贈歌よりむしろ返歌である。頭の中將の返歌は、「大和撫子をばさしおきて、まづ、塵をだに、など親の心をとる」（帚木卷・七三頁）と、頭の中將が自ら語っているように、手紙すら出さず長く放っておいた常夏の女の機嫌を取ることを目的に詠まれた歌である。そのため、「垣は荒るとも」と詠んできた常夏の女の返歌として「分かねども」と同じく逆接表現を用いて詠み、心を通わしている様子を表現しているとも考えられる。藤壺の宮の歌は、源氏への返歌である。藤壺の宮の返歌には、「かたへは御使の心しらひなるべし」（こ返事の一部は取次の女房がつくろって伝えているのである）（賢木卷・一七四頁）という語り手の言葉が添えられている。藤壺の宮の源氏へのこの返歌がさほど出来の良くないことの言い訳であるか

も知れないが、「誰も誰も、ある限り心をさまらぬほどなれば」（賢木巻・一七三頁）と、藤壺の突然の出家に女房たちも気持ちの混乱している時なので、藤壺の宮に仕える教養深い女房でさえ、優れた歌に仕立てて源氏に伝える余裕がなかった時の歌である。八の宮の冷泉院に対する返歌もまた、「なのめなる際の、さるべき人の使だにまれなる山陰に、いとめづらしく、待ちよるこびたまうて」（橋姫巻・二六七頁）と、冷泉院からのまったく思いがけない手紙に気持ちを高ぶらせている八の宮の様子が示されている。その八の宮からの返歌は、「聖のかたをば卑下して聞こえなしたまへれば、なほ世に恨み残りけると、いとほしく御覧す」（橋姫巻・二六七頁）と、「あと絶えて心すむとはなけれども」という逆接の接続助詞を使つて表された八の宮の上の句が、八の宮と冷泉院との間で意味の食いちがいのあつた旨が記されている。さらに、妹の三日夜の餅の儀式を保護者として不慣れに取り仕切る大君の薫への返歌は、「心あわただしく思ひ乱れたまへる名残に、いとどなほなほしきを」（総角巻・六〇頁）と、返歌を早く詠まなければと気のせく上に思案に暮れて詠まれた歌のため、語り手からますますありきたりな歌であると評されているのである。真木柱巻の髭黒の北の方の返歌が詠まれた状況も、これらの例と似通っている。娘の不仲な夫婦関係を案じて、北の方の父である式部卿の宮が髭黒邸へ突然迎えを寄こした場面に見える歌である。北の方に仕える女房たちも里に帰る者など散り散りになる中で、北の方の置かれている悲しく哀れな状況は、「上下泣き騒ぎたるは、いとゆゆしく見ゆ」（真木柱・二二三頁）と記されている。北の方の返歌は、夫である髭黒との夫婦関係に正気を失うまで傷ついた自身の気持ちを抱えながら、そして「御迎への君

達そそのかしきこえて」（真木柱巻・二二四頁）と、実家への出立をせかされている状況のなか、さらに邸を去ることを泣いて悲しむ娘を説得する歌である。「馴れきとは……」という北の方の歌には語り手の評言は記されていないが、もとより尋常な精神状態で詠まれた歌ではない。歌の表現に工夫を凝らすなどの余裕のない状況での詠歌なのである。

これらの用例からは、「とも」「ども」という逆接の接続表現を用いた詠み方は、詠歌の型としては比較的一般的なものであり、まだ歌を詠むことに未熟な子どもでも詠みやすい表現であつたかとも想像される。それゆえ、子どもの詠歌の型としてくり返し物語で見えているとも考えられるのである（注七）。

八 まとめ

以上のように、「源氏物語」の子どもの詠歌に注目した結果、ここからは逆説の接続表現を用いた一つのスタイルを見て取ることができた。その型を用いて詠まれた成人の贈答歌の場面の特徴も考え合わせると、逆説の接続表現を用いた一つのスタイルは、当時の詠みの一般的な型の一つであつたかと想像することができるのである。そのような用例の中で、紫の上の物語第一首目が「ゆゑを知らねば（理由が分からないので）」と、順接で詠まれている特異さが注目できるのである。この紫の上の物語第一首目は、「知る」という語によって、藤壺の宮の形代として生きる道を進まざるを得ない紫の上の寂しい生き方を示す極めて重要な歌である。物語上そのように重要な歌であるために、子どもの詠歌に繰り返し見られるあり

きたりな逆説の接続表現を用いた詠みにはなっていないとも考えらる。

そして、紫の上の二首を含めた、幼い子どもの歌すべてが女性によって詠まれているのは、源氏からの強い思いに直面して戸惑いの気持ち詠む紫の上の歌や、離れて暮らす実母に対して詠まれた明石の君の歌、邸を母親とともに去らなければならない真木柱の君の耐え難く悲しい気持ちを詠んだ歌といった、それら子どもの歌の内容や詠まれた状況を考えるならば、『源氏物語』が描いているのは、やはり女性の人生の悲しさや哀れさであることの一環だと理解できるのである。子どもの詠歌からもその点が理解できるのである。

(注)

(一) 玉鬘の詠歌は、彼女がまだ裳着を済ませていない玉鬘巻から見られるが、玉鬘巻での彼女の年齢は「二十ばかりになりたまふまに」(玉鬘巻・二八六頁)とすでに二十歳あたりであり、当時の成人の年齢になっているため、子どもの歌の用例とはみなさない。

(二) 『源氏物語』の引用本文は、『新潮日本古典集成』に拠る。

(三) 紫の上の年齢については、三十九歳となっている若菜下巻に「今年は三十七にぞなりたまふ。」(若菜下巻・一八八頁)と記されている問題があるとはいえ、若菜巻の当場面は、少納言の発言などから確かに十歳の少女の詠歌場面として描かれていると言えるのである。

(四) 和歌の本文引用は、『新編国歌大観』に拠る。

(五) 若菜巻の当場面までの時点で藤壺の宮と源氏との逢瀬の場面は一度描かれているだけであるが、「宮も、あさましかりしをおぼしいづるだに、世ととも御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深うおぼしたるに

……」(若菜巻・二二二頁)の記述によって、重ねての逢瀬と読めるのである。

(六) 紫の上が物語第一首目を書いた筆跡は、「故尼君のにぞ似たりける」(若菜巻・二三九頁)と、尼君の筆跡に似ていたとされている。この記述からも、紫の上のこれまでの教育は尼君が中心となっていたことが知れるのである。

(七) 紫の上の歌以外の子どもの詠歌四首の中では、童女なれきの歌のみが逆説の接続助詞を用いていないが、先に詠んだ童女の歌が「大空の風に散れども桜花」と詠まれているために、当時の子どもの代表的手習い歌であったと考えられる「大空に覆ふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ」(後撰集)春中・詠み人しらず)が思い起されて、この歌の引用によって詠まれている点に、なれきの歌にも子どもの詠歌らしさが十分表現されていると考えられるのである。

(やぶ・ようこ) 本学非常勤講師